源氏物語

蜻蛉

紫式部
與謝野晶子訳

ひと時は目に見しものをかげろふのあるかなきかを知らぬはかなき（晶子）

宇治の山荘では浮舟（うきふね）の姫君の姿のなくなったことに驚き、いろいろと捜し求めるのに努めたが、何のかいもなかった。小説の中の姫君が人に盗まれた翌朝のようであって、このいたましい騒ぎはくわしく書くことができない。

京からの前日の使いが泊まって帰らなかったため、母夫人は不安がってまた次の使いをよこした。まだ鶏

の鳴いているころに出立たせたと言っている使いにどうこの始末を書いて帰したものであろうと、乳母(めのと)をはじめとして女房たちは頭を混乱させていた。何のわけでどうなったかと推理してゆくことができずに、ただ騒いでいる時、浮舟の秘密に関与していた右近(うこん)と侍従だけには最近の姫君の悲しみよう、煩悶(はんもん)のしようの並み並みでなかったことから、川へ身を投げたという想像がつくのであった。泣く泣く夫人の送ってきた手紙をあけて見ると、

　あまりにあなたが心配で安眠のできないせいでしょうか、今夜は夢の中であなたを見ることすらよくで

きないのです。眠ったかと思うと何かに襲われて苦しむのです。そんなことで気分もよろしくなくて困ります。移転される日の近くなったことは知っていますが、それまでの間をこの家へあなたを来させていたく思います。今日は雨になりそうですからだめでしょうが。

と書かれてあった。昨夜浮舟の書いた返事もあけて読みながら右近は非常に泣いた。こんな覚悟をしておいでになったので心細いようなことをお言いになったのである、小さい時から少しの隔てもなく親しみ合った主従ではないか、隠し事は塵(ちり)ほどもなかった間柄で

はないか、それだのに最後に自分をおうとみになり自殺の気（け）ぶりもお見せにならなかったのは恨めしいと思うと、泣いても泣いても足らず足摺（あしず）りということをしてもだえているのが子供のようであった。悲しんでいたことにはよく気はついていたのであるが、自殺などという恐ろしいことの決行できる方とは見えず、優しい柔らかい心の持ち主だったではないかと、まだ事実を事実として信じることができずにただ悲しいばかりの右近であった。乳母はかえってはげしい驚きのために放心して、

「どうすればいいだろう、どうすれば」

とばかり言っているのである。

兵部卿(ひょうぶきょう)の宮も普通でない気配(けはい)のある返事をお読みになったため、どんなふうな気になっているのであろう、自分を愛していることは確かであるが、移り気であると自分の言われていることに疑いを持っていたから、大将の手へ行くのではなくどこともなく行くえをくらまそうとするのではあるまいか、と不安でならずお思いになって使いをお出しになった。

使いが来てみると家の中は女の泣き叫ぶ声に満ちていてお手紙を受け取ろうとする者もない。どうしたことかと下(しも)の女中に聞くと、

「姫君が昨晩にわかにお亡(かく)れになりましたので、女房がたはだれも気を失ったようになっていらっしゃるのですよ。御用をお取り次ぎしましてもだめでしょう」

と言った。何の事情も知らぬ男であったから、くわしく聞くこともせずに帰ってまいった。そして山荘の出来事を取り次ぎによっておしらせしたのであった。宮は夢とよりお思われにならない。ひどく病をしているというふうでもなく、いつも気分がすぐれぬとは書いてあったが、昨日(きのう)の返事にはそれも書かず、平生のものよりも情の見えることを言って来たではないかと不思議にばかりお思われになって、時方(ときかた)に自身で宇治

へ行き確かなことを調べて来るようにお命じになった。

「あの大将のお耳にどんなことがはいったのですか、宿直（とのい）をする者が忠実に役を勤めないというお叱（しか）りがあったとかで、私の侍が使いにまいったり、帰ったりいたしますのさえ、見つけますと調べ立てるようなことをする者らがあるそうなのですから、口実なしに私が行きまして、それが大将さんへ知れますとあなた様の御迷惑になることが起こるのではございませんでしょうか。そしてまた人が急病でお死にになった所などというものはおおぜいの人が集まってもいるでしょうから」

「だからといって、訳のわからぬままにしておけるものではない。何とか口実を作って行って、こちらの味方になっている侍従などに逢(あ)って、真相を確かめて来てくれ。どんなことをこういうふうに言っているかをね。下人というものはよくまちがったことを聞いて来たりするものだから」

　こう仰せられる宮の御様子においたましいところの見えるのももったいなくて時方はその夕方から宇治へ出かけた。この人たちが急いで行けば早く行き着くこともできるのであった。少し降っていた雨はやんだが泥濘(ぬかるみ)の路(みち)につかれていたし、はじめから侍風に装って

いたのであるし、目だつこともなく門をはいることのできた山荘の中は混雑していた。今夜のうちにお葬儀をしてしまうのであるなどと皆の言っているのを聞いて時方はひどく驚かされた。右近に面会を求めたが逢えない。

「何が何やらわからぬふうになっていまして、起き上がる力もないのです。夜分おそくにでもなりましたらおいでくださいませ。お目にかかれませんのは残念でございます」

と取り次ぎをもって言わせた。

「そうではありましょうが、こちらの御事情がわから

ぬままでは帰りようがありません。もう一人の方にでも逢わせてください」

時方がせつに言ったために侍従が出て来た。

「とんだことになりまして、だれも想像のできませんようなふうでお亡(な)くなりになったものですから、悲しいなどと申す言葉では私どもの心持ちは出てまいりません。夢のように思いまして、だれも皆呆然(ぼうぜん)としておりますとだけ申し上げてくださいませ。少しこうしました気持ちの納りますころになれば、その前にどんなに煩悶をしておいでになりましたかと申すことや、あの宮様のおいであそばした晩に心苦しく思召(おぼしめ)した御様

子などもお話し申し上げることができるかと思います。触穢（しょくえ）の期間の過ぎました時分にもう一度またお立ち寄りください」

と言って侍従ははげしく泣く。奥のほうにも泣き声が幾いろにも聞こえて、乳母らしく思われる声で、

「お姫様どこへいらっしゃいました。帰っておいでくださいませ。御遺骸（いがい）さえ見られませんとはなんたる悲しいことでしょう。毎日毎日拝見しても飽くことのないあなた様でした。そのあなた様の御幸福におなりになるのを祈りますことで生きがいのあった私ではございませんか、それにあなた様は打ちやってお行きにな

りまして、どこへ行ったとも知らせてくださらない。鬼神でもあなた様を取り込めてしまうことはできないはずです。人が非常に惜しむ人は帝釈天（たいしゃくてん）も返してくださるものです。お姫様を取ったのは人にもせよ鬼にもせよ返しに来てください。御遺骸だけでも見せてほしい」

　こう叫んでいるうちに不審な点のあるのに気のついた時方は、

「真相を知らせてください。だれかがお隠しになったのですか。確かに知りたく思召して、御自身の代わりにおよこしになった私は使いです。今ははっきりしな

いままでも事は済むでしょうがあとでほんとうのことがお耳にはいった節、御報告が違っていたものでしたら使いの罪になります。まただれだれに逢えと、御好意を持つものと思召して御名ざしになったのに対しても相済まぬこととお思いになりませんか。一人の女性に傾倒される方は外国の歴史などにもありますが、宮様のあの方への御熱愛ほどのものはこの世にもう一つとはないと私は拝見しているのです」

と言った。道理なことで、この場合の宮の御感情はさもこそと恐察される、隠しても姫君の普通の死でない噂(うわさ)は立つことであろうから、今申し上げておくほ

うがよいと侍従は思い、
「だれかがお隠ししたかという疑いも起こることでしたなら、こんなふうに家じゅうの人が悲しみにおぼれることもないでしょう。お悲しみになってめいったふうになっていらっしゃいましたころに、殿様のほうから少しめんどうなふうの仰せがあったのです。お母様である方も、あのわめいておりますす乳母なども初めからの方へ迎えられておいでになりますことの用意に夢中でしたし、宮様のお志に感激しておいでになりました姫君の思召しはまた別でしたから、それでお頭（つむり）が混乱してしまったのでしょう、思いも寄らぬことにな

りまして心身ともに失っておしまいになったので、あの乳母のようなむちゃな叫びもされるのですよ」

さすがに正面から言おうとはせずにほのめかしていることのあるのを内記も知った。

「それではまたお静かになってから改めて伺いましょう。立ちながらの話にしてはあまりに失礼なことになります。そのうち宮様御自身でもおいでになることになりましょう」

「もったいない、それはいけません。今になりましていっさいの秘密の暴露してしまいますことは、お亡くなりになりました方のためにあるいは光栄なことかも

存じませんが、十分隠したく思召したことですから、秘密は秘密のままにしてお置きくださいますほうが御好志になります」

などと侍従は言い、姫君の最後が普通の死でないことをほかへ洩(も)らすまいとしていても、自然に事実は事実として人が悟ってしまうことであろうと思い、［＃「、」は底本では「。」］こんな会談を長くしていることも避けねばならぬと思う心から時方を促して去らしめた。

雨の降る最中に常陸(ひたち)夫人が来た。遺骸があっての死は悲しいといっても無常の世にいては、どれほど愛し

ていた人でもある時は甘んじて受けなければならぬのが人生の掟（おきて）であるが、これは何と思いあきらめてよいことかと悲しがった。苦しい恋の結末をそうしてつけたことなどは想像のできぬことで、身を投げたなどとは思い寄ることもできず、鬼が食ってしまったか、狐（きつね）というようなものが取って行ったのであろうか、昔の怪奇な小説にはそんなこともあるがと夫人は思うのであった。また常に恐れている大将の正妻の宮の周囲に性質の悪い乳母というような者がいて、薫（かおる）が浮舟をここへ隠して置いてあることを知り、だまして人につれ出させるようなことがあったのではあるまいか

と、召使いに疑いをかけて、
「近ごろ来た女房で気心の知れなかったのがいましたか」
　と問うた。
「そんなのはあまりにこちらが寂しいと申していやがりまして、辛抱もできませんで、京へお移りになればすぐにまいりますというような挨拶をしまして、仕事などだけを引き受けて持って帰ったりしまして、現在ここにいるのはございません」
　答えはこうであった。もとからいた女房も実家へ行っていたりして人数は少ない時だったのである。侍

従などはそれまでの姫君の煩悶を知っていて、死んでしまいたいと言って泣き入っていたことを思い、書いておいたものを読んで「なきかげに」という歌も硯(すずり)の下にあったのを見つけては、騒がしい響きを立てる宇治川が姫君を呑(の)んでしまったかと、恐ろしいものとしてそのほうが見られるのであった。ともかくも死んでおしまいになった人が、どこへだれに誘拐(ゆうかい)されて行っているかというように疑われているのは気の毒なことであると右近と話し合い、あの秘密の関係も自発的に招いた過失ではないのであるから、親である人に死後に知られても姫君として多く恥じるところもないので

あると言い、ありのままに話して、五里霧中に迷っているような心境をだけでも救いたいと夫人を思い、また故人も遺骸を始末するのが世の常の営みなのであるから、そのまま空で悲しんでばかりいることをしていては日が重なるにしたがい秘密は早く世の中へ知られてしまうことでもある、その体裁も相談して作るほうがよい、どうしても真実を母夫人に知らす必要があるとして、ひそかに兵部卿の宮との関係、そののち大将に秘密を悟られて姫君が煩悶した話をするのであったが、語る人も魂が消えるようになり、聞く人もさらに予期せぬ悲哀の落ち重なってきたふためきをどうする

こともできないふうであった。それではこの荒い川へ身を投げて死んだのかと思うと、母の夫人は自身もそこへはいってしまいたい気を覚えた。流れて行ったほうを捜させて遺骸だけでも丁寧に納めたいと夫人は言いだしたが、もう大海へ押し流されたに違いない、効果は収めることができずに人の噂だけが高くなることははばからなければならぬことを二人は忠告した。どうすればよいかと思うと胸がせき上がってくる気のする常陸夫人は、どうと定めることもできずに茫（ぼう）としているのを二人がたすけて、車を寄せさせて姫君の常に坐（ざ）していた敷き物、身近に置いた手道具、もぬけになっ

ていた夜具などを入れ、乳母の子の僧と、それの叔父(おじ)にあたる阿闍梨(あじゃり)、そのまた親しい弟子(でし)、もとから心安い老僧などで忌中を籠(こも)ろうとして来ていた人たちなどだけに真実のことを知らせ遺骸のあってする葬式のように繕わせて出す時、乳母は悲しがって泣き転(まろ)んだ。宇治の五位、その舅(しゅうと)の内舎人(うちとねり)などという以前に嚇(おど)しに来た人たちが来て、

「お葬式のことは殿様と御相談なすってから、日どりもきめてりっぱになさるのがよろしいでしょう」

などと言っていたが、

「どうしても今夜のうちにしたい理由(わけ)があるのです、

目だたぬようにと思う理由もあるのです」

と言い、その車を川向かいの山の前の原へやり、人も近くは寄せずに、真実のことを知らせてある僧たちだけを立ち合わせて焼いてしまった。火は長くも燃えていなかった。田舎（いなか）の人はこうした作法はかえって都人より大事にするもので、そしてこの場合の縁起を言ったりすることもうるさいほどにするものであったから、大家の夫人の葬儀とも思われぬ貧弱な式であったと譏（そし）る人があったり、また側室であった人の場合はこんなふうにして済まされるのが京の風俗であるなどと言ったり、いずれにもせようれしくない取り沙汰（ざた）を

人はした。そうした階級の人がどう思ったかということさえもつつましいこの場合に、大将が遺骸も残さず死んだと聞いては必ずどこかへ失踪をしてしまったことと疑うであろうし、親族関係の濃い宮様のほうへその話の伝わってゆかぬはずもない、その時に宮がお隠しになったと大将は思うまい、どんな人が隠しているかと思い想像もされるに違いない、生きていた間は高い貴人たちに愛される運命を持った人が、死後に醜い疑いをかけられるのはもってのほかであると女房らは思い、山荘の中の下人たちにも今朝姫君の姿の見えなかった騒ぎに、思わずも実相を悟らせることになった

者らへは口堅めを厳重にし、知らなかったのにはあくまでも普通の死であったように取り繕うことに侍従と右近は骨を折った。時間がたったのちには浮舟の姫君が死を決意するまでの経過を宮へも大将へもお話しすることができようが、今は興ざめさせるような死に方を人の口から次へ次へと聞こえることは故人のためには気の毒であると思い、この二人が自身らの責任を感じる心から深く隠すことに努めた。

この時に薫は母宮が御病気におなりになって石山寺へ参籠（さんろう）をあそばされるのに従って行っていて騒がしく暮らしていたのであった。京よりもまだ遠くにいて宇

治のことが気がかりでならぬ薫でもあったが、はかばかしく消息をする人もなかったために、葬儀にも大将家の使いの立ち合わなかったのは山荘の人々の情けなく思うところであったが、荘園の人が石山へ行ってはじめて姫君の死は薫へ報じられたのであった。使いはその翌日の早朝に宇治へ来た。

非常なことの起こったしらせを受け、すぐにも自分で行くべきですが、母宮の御病気のために日数をきめて籠（こも）っているために、それも実行ができません、昨夜にもう葬送を行なったということですが、なぜそれは私へ相談をしませんでしたか、そして日を延

べることが普通ではありませんか。しかも簡単に儀式をしてしまったと聞いて残念に思います。どうしてもこうしてても同じことですが、一人の人間の最後の式ですから、田舎の人たちの譏りを受けたりすることになっては、自分のためにも迷惑です。
と、あの親しく思っている大蔵大輔を使いにして言わせたのであった。使いの来たことでまた悲しみが新しくなったし、答える言葉も何と言ってよいかわからぬ時であってみれば、人々は泣くのを挨拶に代えて何とも申し出すことはできなかった。

薫は思いがけぬ愛人の死に落胆をして、情けない場

所である、幽鬼などが住んでいてそうした災厄(さいやく)をしばしば起こすのでなかろうか、それと気もつかずにどうして長く宇治などへ置いていたのだろう、不快な関係がほかに結ばれたらしいことなども、ああした不用心な所へ住ませておいたために隙(すき)をうかがわせることになったに違いない、と思われるのも皆自分の非常識に原因したことであると胸が痛くなるほどにも悔まれた。御病気で専念に仏へ祈っておいでになる母宮のおそばでこんな煩悶(はんもん)をしているのはよろしくないと思い薫は京の邸(やしき)へ帰った。夫人の宮のところへは行かずに、

「たいしたことではないのですが、身辺に不幸が起

こったものですから、しばらく落ち着きますまで、縁起の悪いことにもなりますから謹慎していようと思います」

などと御挨拶をしておいて、一人で人生の深い悲しみを味わっていた。浮舟(うきふね)の容姿の愛嬌(あいきょう)があって、美しかったことなどを思い出すと、非常に恋しくなり、悲しくなる薫は、その人の生きていた時には、それをそうと認めようとはせずに、たびたび逢いに行こうともせず、寂しい思いばかりをさせて来たのであろうと思う後悔があとからあとからわいてくる。恋愛について物思いの絶えない宿命をになっている自分である、

信仰生活を志していながら俗から離れずにいるのを仏が憎んでおいでになるのであろうか、悟らせようとしての方便には未来の慈悲を隠してこんな残酷な目も仏はお見せになるものであると、思い続けて仏勤めをばかりしていた。

浮舟をお失いになった兵部卿の宮は、まして二、三日は失心したようになっておいでになったため、どうした物怪(もののけ)が憑(つ)いたかと周囲の人たちが騒いでいるうちに、ようやく涙が流れ尽くしてお心が静まってきたと同時に、生きていた日の浮舟が恋しくばかりお思い出されになるのであった。他人には重く病気をしている

ふうを見せて、亡（な）き恋人を思う悲歎に沈んでいることは知らせないでいるのであると、御自身では思召したが、自然御様子にそれが現われるものであるから、どんなことにお出逢いになって、こんなに命もあぶないまでに悲しんでおいでになるのであろうという人もあるために、大将もそれを知り、故人とは自分の想像したような関係を作っておいでになったらしい、手紙をおやりになったりするだけのことではないのであった、宮が御覧になれば必ず深い愛着をお覚えになるはずの人であった、生きていたならば自分は裏切られた男としての醜名を取らなければならないのであったと、こ

う思うようになってからは少し故人へのあこがれがさめた気のする薫であった。

兵部卿の宮の御病気見舞いに伺候せぬ人もなく、世間の騒ぎにもなっている場合であるのに、たいした喪というわけでもないのに、自分がお見舞いにならないのも僻見をいだいているように見られることであろうからと思い、薫は二条の院へ伺った。この時分に式部卿(しきぶきょう)の宮と言われておいでになった親王もお薨(かく)れになったので、薫は父方の叔父(おじ)の喪に薄鈍(うすにび)色の喪服を着けているのも、心の中では亡き愛人への志にもなる似合わしいことであると思っていた。顔は少し痩(や)せてい

よいよ艶（えん）に見えた。お見舞い客が皆去ったあとの静かな夕方であった。

宮は御病気らしくお見えにはなっても、ただお気持ちが重く沈んでしかたがないという御状態にすぎないのであったから、うとうとしい人とは御面会にならぬが、お居間の中へ平生はお通しになる御親交のある人たちとはお逢いになるのであったから、薫を御引見になったが、その人の顔を御覧になると理由もなく恥ずかしくお思われになり、心弱くなっておいでになるのが隠しきれぬような涙になって出るのをきまり悪く思召しながらも、よく心持ちをお抑（おさ）えになり、

「たいした病気ではありませんが、だれもが悪くなってゆく兆候のある容体だと言って騒ぐものですから、お上(かみ)も中宮(ちゅうぐう)様も御心配あそばされるのが苦しく思われてね。それにつけてもまた人生の心細さが感ぜられてなりませんよ」

　こうお言いになり、ちょっと袖(そで)で押すほどに拭(ぬぐ)うてお済ませになるつもりでおありになった涙が、どうしたかとめどもなく流れ落ちるのを、見苦しいと思召すのであるが、浮舟のために泣くとは大将に気のつくはずもなかろう、ただ人生にめめしく執着をしていると見えるだけであろうと、薫の心中を御推測のできぬ宮

は思っておいでになった。やはり恋人の死ばかりを悲しんでおいでになるのであった、いつごろからあった事実なのであろう、自分を滑稽（こっけい）な男と長い間笑っておいでになったのであろうと思い、薫は悲しみもそれで忘れることができているのを宮は御覧になり、死んだ愛人に対して非常に冷淡なものである、ものの痛切に悲しい時には全然関係のないことにさえ涙が誘われ、空を鳴いて通る鳥の声にも哀傷の思いは催されるはずではないか、自分が何の悲しみによって病んでいるかを知ったなら、同情から平気には見ておられぬ人なのであるが、人生の無常を深く悟り澄ました人はこんな

に冷静なふうでいられるのであろうとうらやましく、御自身の及びがたさをお覚えになるのであるが、「我妹子（わぎもこ）が来ては寄り添ふ真木柱（まきばしら）そも睦（むつ）まじやゆかりと思へば」という歌のように、あの人を愛した男であるとお思いになるとこの人にさえ愛のお持たれになる兵部卿（ひょうぶきょう）の宮であった。この人とある日は向かい合っていたのかとお思いになると、形見であるというように薫の顔がお見守られになった。いろいろな世間話を申しているうちに、絶対に浮舟のことは言いださぬという態度はお取りしたくないと思い、

「私は昔からどんなこともあなた様に申し上げないで、

自分だけで思っているのがとても苦しいのではございますが、今では知らぬまに私のような者も大官になっておりますし、ましてあなた様はいろいろとお忙しい身の上でお閑暇（ひま）などはありますまいと存じまして、宿直（とのい）などをいつでも申し上げて話を聞いていただくようなこともできませず日を過ごしておりましたが、こんなことをひとつお聞きください。昔も御承知のあの山里に若死にをしました恋人と同じ血統（ちすじ）の人が意外な所に一人いると聞きまして、昔の人の形見にときどき顔を見て慰めにしようと思ったのですが、ちょうど私といたしましては、そんなことをしては、世間からわ

けもなく悪く批評をされる時だったものですから、昔の寂しい山里へつれて行ってあったのでございます。そして始終は訪ねて行ってやることもない間柄になっていましたし、その人も私一人にたよる心もなかったように見えましたが、唯一の妻としては、そうした不純な心のあることは捨てておけないことですが、愛人としておくぶんには許されなくはないものですから、可憐に見ておりましたが突然亡くなったのでございます。人生の悲哀がまたしみじみと味わわれまして、寂しい思いをしております。もうそのことはお耳にもどちらからかはいっておりますでしょう」

と言って、この時になって泣き出した。薫(かおる)としてもこれほど悲しむふうはお見せすまいと自戒していたのであったが、こぼれ始めてはとどめがたい涙になった。その様子に別な意味もあるふうなのを宮もお悟りになり、気の毒に思召したが、素知らぬふうをあそばした。

「御愁傷をお察しします。そのことは昨日ちょっと聞いたのでした。御弔問をしたく思いましたが、秘密にしておありになるのだとも聞いたものですから」

言葉少なにこうお言いになった。長く言うに堪えがたいお気持ちになっておいでになったのである。

「お目にかけましたら興味をお覚えになりますだけの価値のある女性でしたが、それは私の思いますだけでなくあなたの奥様のほうの縁故のある人でしたから、もう顔など知っておいでになったかもしれません」

などと少しほのめかして薫は、

「御病気中はうるさい世の中のことなどをお耳に入れましては御安静をお妨げすることになってもよろしくございません。よく御養生をなさいまし」

と申して辞し去った。非常に悲しがっておいでになった、故人を哀れな存在とは見たが、現在の帝王と后（きさき）があれほど御大切にあそばされる皇子で、御容貌（ようぼう）

といい、学才と申して今の世に並ぶ人もない方で、すぐれた夫人たちをお持ちになりながら、あの人に心をお傾け尽くしになり、修法、読経(どきょう)、祭り、祓(はらい)とその道々で御恢復(かいふく)のことに騒ぎ立っているのも、ただあの人の死の悲しみによってのことではないか、自分も今日の身になっていて、帝(みかど)の御女(おんむすめ)を妻にしながら、可憐(かれん)なあの人を思ったことは第一の妻に劣らなかったではないか、まして死んでしまった今の悲しみはどうしようもないほどに思われる、見苦しい、こんなふうにはほかから見られまいと忍んでいるのであるがと薫は思い乱れながら「人非木石皆有情(ひとほくせきにあらずみなうじやう)、不如不逢傾城色(しかずけいせいのいろにあはざるに)」

と口ずさんで寝室にはいった。葬儀なども簡単に済ませたことを宮も飽き足らず思召したことであろうと哀れに思われて、母の身分がよろしくなくて、異父の弟などが幾人も立ち合ってなどとあとに言われることを避けて急いでしたのであろうがと不愉快に薫は思った。くわしい様子も聞かないでいることも物足らず思われ、自身で宇治へ行ってみたいと思うのであるが、喪の家へそのまま忌の明けるまで籠（こも）っているのも自分としてははばかられる、行くだけ行ってすぐに帰るのも心苦しいことであると思いもだえていた。

月が変わって、今日は宇治へ行ってみようと薫の思

う日の夕方の気持ちはまた寂しく、橘（たちばな）の香もいろいろな連想（れんそう）を起こさせてなつかしい時に、杜鵑（ほととぎす）が二声ほど鳴いて通った。「亡（な）き人の宿に通はばほととぎすかけて音（ね）にのみなくと告げなん」などと古歌を口にしたままではまだ物足らず思われ、二条の院へ兵部卿の宮の来ておいでになる日であったから、橘の枝を折らせて、歌をつけて差し上げた。

忍び音（ね）や君も泣くらんかひもなきしでのたをさに
心通はば

宮は中の君の顔の浮舟によく似たのに心を慰めて、二人で庭をながめておいでになる時であった。言外に意味のあるような歌であると宮は御覧になり、

橘の匂（にほ）ふあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ

なんだかかかりあいのあるようなことが言われますね。

とお返事をあそばした。宮と浮舟の姫君の関係もまたその人の死も何に基因するかも今は皆わかってし

まった中の君は、姉の女王(にょおう)も妹の姫君も物思いがもとで皆若死にをしたあとに、自分だけが残っているのは感情の鈍(にぶ)い質であるからであろうか、それといってもいつまでも生きていられることかと心細く思った。宮も隠しておきになっても、いずれは知れてしまうことであるのに、隔てを置いたままでいるのは苦しいことであると思召して、浮舟との関係を少しは取り繕って夫人へお話しになった。

「だれであるのかをあなたがどこまでも隠そうとしたのが恨めしかったために反発(はんぱつ)的にそんなことにまで進んでしまったのですよ」

など、泣きも笑いもしながらお語りになる相手が、恋人の姉であることにお慰みになるところも多かった。形式が簡単でなく、ちょっとお身体の悪いことのあっても騒ぎがはなはだしくなり、見舞いに集まる人も多く、父の大臣、その息子たちと絶え間なしに病床に付き添っているようなところと変わり、二条の院においでになることは気楽でなつかしい気分を十分お得になられることであったのである。浮舟の死んだことはまだ夢のようにばかりお思われになり、どうして急にそうなったかという不審がお解けにならぬため、例の内記たちをお召しになり、右近を呼びにおつかわしに

なった。

　母の常陸夫人も宇治川の音を聞くと自身も引き入れられるような悲しみが続くために困って京へ帰って行った。念仏の役を勤める僧だけが頼もしい人のようなかすかな家と見えたが、内記がはいって行っても、人が来るとすぐに外を見まわりに来るような宿直（とのい）の侍もない。今はこうであるのに、あの最後の時にだけはこんな者たちが妨げて宮をお入れしなかったと時方（ときかた）らは思い出して悲しんだ。それほどまでに悲しみにお溺（おぼ）れにならずともよいではないかと、常は非難がましく宮をお思いしている人たちであるが、ここへ来て見る

と、あの無理をして通っておいでになったあの場合、その場合が思い出され、宮にお抱かれして船に乗った方の美しかったことなどを思い出すと、だれも心強くなっておられる者はなくなって皆泣いていた。

　右近が出て来て非常に泣くのももっともなことと思われた。宮がこういう思召しで迎えのために自分らをおつかわしになったということを語ると、今になって他の女房たちからも怪しいことと言われ、思われするであろうことが苦しく考えられて、

「まいりましてもよくおわかりいただきますほどな細かなお話がまだできます自信がございません。お四十

九日が済みましたあとで、ちょっと外へまいると申すような体裁を作りましても不自然でないころになりました時、私はもう生きても居られない気はいたしますものの、まだ生き延びておられましたなら、お召しがございませんでも伺いまして、ほんとうに夢のようでございました悲しいお話も申し上げたいと思います」

と言い、今は動きそうにもない。内記も泣いて、

「私は何も細かい御関係のことまでは知らないのですし、事情もわかりませんが、宮様がどんなに深い愛をお持ちになりましたかということだけは存じ上げていたものですから、あなたがたとも急いで御懇意になら

ずとも、しまいには御主人としてお仕えする方についておいでになる方と思いまして呑気（のんき）にして来たのですが、お亡（かく）れになってはじめてあなたがたにもいろいろと御心配をお掛けしたことが相済まぬ、あなた様はよくお尽くしくださいましたと感謝の念でいっぱいに心がなりました」

　などと言っていた。

「車も宮御自身でお指図（さしず）になってお持たせになったのですから、あき車をまた引かせては帰れません。もう一人の方でも来てくださいませんか」

と内記が言うので、右近は侍従を呼び、

「あなたが伺ってください、私の代わりに」

と言った。

「あなたでさえもお話を申し上げる自信が持てないのに、私にどうしてそれができましょう。それにしましても忌中の者がお邸（やしき）へまいったりすることは縁起の悪いことではございませんか」

「御病気のためにいろいろなふうに御謹慎をなさらねばならなくなっていらっしゃいますが、そんなこともかまっておいでになれない御様子なのです。また考えてみますと、あれほどお愛しになった方のためには宮様御自身が忌におこもりになってもよろしいわけなの

ですからね、もう忌の残りが幾日もあるのではないのですから、ぜひお一人だけは来てください」

内記がこう責めるので、侍従も宮の御様子をおなつかしく思い出している心から、もう一度お目にかかりうる機会などというものはありえないことであるから、こうした時にでもと願うようになり、まいることにした。黒い服ながら引き繕って着た姿はきれいであった。裳（も）は現在では主人のいない家であったから喪の色のも作らなかったため、淡紫（うすむらさき）のを持たせて車に乗った。姫君がおいでになったなら、宮にこうして迎えられておいでになったであろう、自分はその時にお付きして

行こうと心にきめていたのであったがと思い出すのは悲しかった。途中をずっと泣きながら侍従は二条の院へまいった。

兵部卿の宮は侍従の来たしらせをお受けになっても身にしむようにお思われになった。夫人へは恥ずかしくてお話しにはならなかったのである。宮は寝殿のほうへおいでになり、そこの廊のほうへ車を着けさせて侍従を下(お)ろさせになった。

浮舟(うきふね)のことをくわしく聞こうとあそばすと、そのずっと前から煩悶(はんもん)をし続けていたこと、その前夜にひどく泣いたことなどを言い、

「怪しいほどお口数の少ない方で、内気でいらっしゃいましたから、遺言らしいことは何もなさいませんでした。夢にも自殺などという強いことのおできになるとは思われませんでした」

などと侍従が話すことによって、宮はいっそうお悲しみが深くなり、命数が尽きて死んだということよりも、どんなに物思いを多くして恐ろしい川へなど身を投げたのであろうと御想像あそばすのが苦しく、その時に見つけることができてとどめえたならばと、沸きかえるような心持ちにおなりになるのであるが、今ではすべてむなしいことであった。

「あのお手紙を始末してお焼きになりました時に、なぜ私らの頭が働かなかったのでございましょう」

と侍従は言ったりして、夜の明けるまで語っても語り足りないというふうであった。寺からもらった経巻へ書いて母君の返事にした歌のことなどもお話しした。侍従などは何とも宮の思っておいでにならなかった女であったが、哀れに思召すために、

「自分の所にいるがよい。あちらにいる奥さんもあの人には他人でなかったのだから」

と仰せられたが、

「そうしてお仕えさせていただきましては何も何も悲

しいことになりましょう。ともかくもお忌を済ませましてから、どうとも身の振り方を考えます」

侍従はこう申し上げた。

「また来るがいい」

こんな人とすらも別れるのを悲しく宮は思召した。浮舟のために作らせておありになった櫛(くし)の箱一具、衣裳(いしょう)箱一つを宮は贈り物にあそばした。その人のためにお設けになった物は多かったのであるが、これはただ内記に託しておこしらえになっただけのものであった。

突然山荘を出て来て、こうした戴(いただ)き物をして帰っ

ては他の人々が何と思うであろう、少し困ったことであると侍従は思ったのであるが、御辞退のできることでもなかった。

宇治へ帰った侍従は右近と二人でひそかに櫛の箱と衣箱の衣裳をつれづれなままにこまごまと見た。はなやかな錦繡（きんしゅう）の服と精巧な作の箱、その中の小箱を見ながらも二人は非常に泣いた。喪にこもっている自分たちはこれをどう隠しておればいいかということにも苦心を要した。

薫も思い余って宇治へ行くことにした。途中からもう昔のことがいろいろと胸へ集まってきて、どんな因

縁で八の宮の所へ自分は行き始めたのであろう、二人の女王に失恋をして、父宮から子とも認められなかった人にまで縁が生じ、この一家との結ばれによって物思いばかりを自分はし続ける、尊い悟りをお持ちになった方へ仏の導きで近づき、未来の世界での交わりを約していながら、女王に心を引かれ始めて、信仰をよそにした報いを受けるのであろうと、こんなことも思われた。

大将は右近を前に呼んで話そうとしたが、悲しみが先に立ちはかばかしい質問もできない。

「もう忌の残りの日も少なくなったのだから済んでか

らと思ったが、どうしても待ちきれないものがあって来た。どんな病状でにわかにあの方は死ぬようになられたか」

　と問われ、右近は弁の尼なども姫君の遺骸のなくなっていたことは気(け)どっているのであるから、隠してもしまいには薫の耳にはいることに違いない、かえってことを蔽(おお)おうとして誤解を招くことになっては姫君が気の毒である、あの不始末を処理するためにはいろいろな嘘(うそ)も言われたのであるが、このまじめな人に対しては、今までも逢(あ)った時にはこうも弁解しああも言ってと考えていたことは皆忘れてしまい、嘘は恐ろ

しくなり真実の話をした。これは薫の想像にものぼらなかったことであったから、驚きのためにしばらくはものも言われなかった。それを真実とは信じがたい、普通の人が煩悶（はんもん）をしたり、悲しんだりする場合にも多くは口に言わずおおようにしていた人にどうしてそんな恐ろしいことが思い立たれるか、そのほかの事実を自分へこう取り繕って言うのではなかろうかと、いっそう心の乱れてゆくのを覚える薫であったが、しかしあの人をお隠しになったようでもなく宮が悲しんでおいでになったことは著しいことであったし、この家の様子も、死が作り事であれば自然に気配（けはい）が違っている

はずであるのに、自分の来たのを見ると人は上から下まで集まって来て泣き騒いでいるではないかと考え、
「奥さんといっしょに行ってしまった人があるか、もっと詳細にその時のことを言ってくれ。私に誠意がないからほかへ行ってしまう気にあの人がなったとは思われない。何もなくてにわかにそんなことができるか、私は信じることができない」
と言った。予期した詰問であると右近は恐れた。
「もうおわかりになっていらっしゃいましたでしょうが、宮様の姫君としてお育てられになったのではございませんでしたから、心でいろいろ御苦労をなされた

方でございます。それが寂しいお住まいをなさることになりましてからはいつからともなく物思いをなさいますことになりましたのですが、たまさかにもせよあなた様がおいでになります時のお喜びで過去の不幸も御自身でお慰めになりながらも始終お逢いあそばすことのできますような日の出現を、口に出してはおっしゃいませんでしたが始終そればかり待っておいでになったふうでございました。ようやくそのお望みのかないます御様子と私どもにもうかがえますことがございまして、うれしく存じて御用意にかかっておりまして、常陸守（ひたちのかみ）の奥様もやっとお喜びになることができた

御様子でお仕度（したく）のことなどをあちらからもいろいろとお世話をしていらっしゃいましたころになりまして、姫君には御合点のゆかぬような御消息がございましたそうで、それと同時に宿直（とのい）をいたしている侍たちが女房の中に品行の修まらぬ者があるとか京のお邸（やしき）で申されたとか言いだしまして、ものの理解のない田舎（いなか）の人が無遠慮なことをよく言ってまいったりすることになりますし、あなた様から久しくおたよりもございませんことなどから、自分は薄命なものだと小さい時から知っていたのを、人並みの幸福を得させようと心を砕いておいでになる母君が、また今になって自分が世

間の笑われものになったりしては、どんなに力を落とすだろうと、こんなお心持ちをそれとなく私どもへ始終言ってお歎きになりました。それ以外に何があるかと考えましても、何も思い当たることはございません。鬼が隠すことがありましても片端くらいは残すでしょうのに」

と言って右近の泣く様子は、見ていても堪えられなくなるほどのものであったから、宮との例の恋愛の事実は無根でないらしいと悟った時から少し紛れていた薫の悲しみがよみがえり、せきあえぬふうにこの人も泣いた。

「自分の身が自分の思っているとおりにはできず、晴れがましい身の上になってしまったのだから、逢って慰めたいという心の起こる時も、そのうち近くへ呼び寄せ、家の妻にも不安を覚えさせないようにしてから、長い将来を幸福にしたいと、自分をおさえてきたのを、誠意がなかったように思われたのも、かえってあの人に二心があったからではないかという気がされる。もうそんなことは言わずにおこうと思ったが、だれも聞いていないのだから事実を私に聞かせてくれ、それは兵部卿（ひょうぶきょう）の宮様のことだ。いつごろからのことだったのか、恋愛の技術には長じておいでになる方だから、

女の心をよくお引きつけになって、始終お逢いできぬ歎きがこうさせておしまいになり、命もなくしたのではないかと思う。隠さずに真実を言ってくれ。自分に少しの欺瞞(ぎまん)もないことを言ってほしい」

と薫(かおる)の言うのを聞いて、確かなことを皆知っておしまいになったようである、この方もお気の毒であるし、故人もおかわいそうであると右近は思った。

「情けないことをお聞きあそばしたものでございますね。右近がおそばにおらぬ時といってはございませんでしたのに」

と言い、右近はしばらく黙っていたが、

「そんなこともお聞きになっていらっしゃいましょうが、お姉様の二条の院の奥様の所へ行っておいでになりました時、思いがけずそのお部屋(へや)へ宮様がお見えになったことがあるのでございますが、失礼なことも皆でいろいろ申し上げましてお立ち去りを願ったのでございました。実はそれを恐ろしいことに思召して、あの三条の仮屋(かりや)のような所にしばらくお住いになったのでございます。それからは決してお在処(ありか)をお知らせしますまいと警戒をいたしておりましたのに、どういたしましたことか今年(ことし)の二月ごろからおたよりがまいるようになりました。お手紙はたびたびまいったのです

が、丁寧にお頼みになることもございませんでしたのを、もったいないことで、そうしてお置きになりますことはかえって悪い結果を生みますと私などがお勧めいたしましたので、一度か二度はお返事をあそばしたことがあったようでございます。それ以外のことは何もございません」

こう言った。そう言うべきことである、しいてそれ以上を聞くのもこの人がかわいそうであると薫は思い、じっとひと所をながめながら、宮をお愛ししたのであろうが、自分をもおろそかには思えなかったらしい、迷い迷って死におもむいたのであろう、自分がこうし

た寂しい場所へさえ置かなんだならば、世の中の波にもまれることはあっても、自殺までもすることはなかったであろうと思うと、この川のあったがために悲しい結末を見ることになったのであると、宇治の流れを憎く思う薫であった。恋しい人の縁で荒い山路（やまみち）を往復（ゆきかえり）することを何とも思わなかった薫は、この時になって宇治という名を聞くことさえいやであるように思った。宮の夫人があの姫君のことを初めに戯れて人型（ひとがた）と名づけて言ったのも、川へ流れてゆく前兆を作ったものであったかと思うと、何にもせよ自分の軽率さから死なせたという責任も感じられた。母の現在

の身分が身分であったから、葬式なども簡単にしてしまったのであろうと不快に思ったこともくわしく聞いたことによって、そうした想像をしたことが気の毒になり、母としてはどんなに悲しがっていることであろう、あの身分の母の子としてはりっぱ過ぎた姫君であったのを、陰のことは知らずに自分との縁により、姫君が煩悶をしたこともあったとして悲しんでいることかもしれぬなどと同情がされるのであった。穢(けが)れというものはこの家にないはずであるが、供の人たちへの手前もあって家の上へは上がらず車の榻(しじ)という台を腰掛けにして妻戸の前で今まで薫は右近と語っていた

のである。これを長く続けているのも見苦しく思われて茂った木の下の苔(こけ)の上を座にしてしばらく休んでいた。もう山荘に来てみることも心を悲しくするばかりであろうから、今後来ることはないであろうと思い、その辺を見まわして、

われもまたうきふるさとをあれはてばたれ宿り木
の蔭(かげ)をしのばん

こんな歌を口ずさんだ。

以前の阿闍梨(あじゃり)も今は律師になっていた。その人を呼

び寄せて浮舟(うきふね)の法事のことを大将は指図(さしず)していた。念仏の僧の数を増させることなども命じたのであった。自殺者の罪の重いことを考えてその滅罪の方法も大将はとりたい、七日七日に経巻と仏像の供養をすることなども言い置いて、暗くなったのに帰って行く時、あの人がいたならば今夜は帰ることでないのであると悲しかった。尼君の所へ人をやったが、

「私と申すものが凶事のしるしのように思われまして、心をめいらせておりますこのごろは、以前よりもいっそうぼけてしまいまして、うつ伏しに寝(やす)んだままでおります」

と言い、話しに出てこなかったので、しいて逢おうとは言わなかった。

途（みち）すがら薫は浮舟を早く京へ迎えなかったことの後悔ばかりを覚えて、水の音の聞こえてくる間は心が騒いでしかたがなかった。遺骸だけでも捜してやることをしなかったと残念でならないのであった。どんなふうになってどこの海の底の貝殻（かいがら）に混じってしまったかと思うと遺瀬（やるせ）なく悲しいのであった。

常陸夫人は京に産をする娘のあるために潔斎潔斎ときびしく言われる家へははいれないで、他のところにいて悲しみの休む間（ひま）もないのである、その娘もまたど

うなることかと不安だったがそれは安産した。穢れがあってはこれも見に行くことができないのである、そのほかの子供たちのことも皆忘れたようになり、茫然としている時に右大将からそっと使いが来て手紙をもらった。ぼけている心にもそれはうれしかったが、また悲しくもなった。

思いがけぬ不幸にあい、まずあなたに悲しみを訴えたいと思ったのですが、心が落ち着かず、また涙に目も暗くなる気がして実行はできませんでした。またしてあなたはどんなに悲しんでおいでになることだろう。涙に沈んでおいでになることだろうと思いま

すと、手紙をあげてもお読みにはなれまいと遠慮も申しているうちに日がずんずんとたちました。人生の常なさがことごとに形となってわれらをおびやかします。この悲しみにも堪える力の許されて、私が生きていましたなら、故人の縁のあった者として何かのことは御相談もしてください。

などとこまやかな心で書かれたものだった。使いにはあの大蔵大輔（たゆう）が来たのである。

「すべてを気長に考えていたものですから、かなり月日はたっていても、必ずしも私を誠意のある婿とは思ってくださらなかったでしょう。しかし今は何につ

けてもあなたの御一家のことは念頭に置いて忘れますまい。またそのように内々信じてくだすって、お力になるものと思っていてください。小さい息子（むすこ）さんたちもあるそうですが、仕官をおさせになる場合には必ず後援をするつもりで私はいます」

と、言葉でも伝えさせた。ひどく忌む性質の穢れでもないからと言って、夫人はしいて大輔を座敷へ招じた。そして返事を泣く泣く書いていた。

悲しい思いをいたしますだけでは死なれませぬ命を歎いております私へ、もったいないおいたわりの言葉などのいただけますとは夢想もいたしませんでし

た。故人がおりました間、心細い様子は見ておりながら、それは私自身の無力からであると存じまして、ただおそれ多い行く末かけてのあたたかいお言葉一つを頼みにいたしておりましたが、死なせましてあとではあの地との因縁が悲しくばかり思われてなりません。いろいろと将来のことでうれしい仰せを賜わりましたことで、命の延びることにもなりまして、今しばらく生きてまいれますことになりましたら、その息子たちのことであなた様のお力におすがり申し上げる日もあろうと思いますにつけましても、あの人の亡くなってありませぬ現在の悲しみに目も涙

で暗くなるばかりでございまして、感謝の思いも書き尽くすことができませんのをお許しください。

などと書いた。使いへの贈り物に普通の品を出すべき場合ではないし、またそれだけでは不満足な感じをあとでみずから覚えさせられることであろうからと思い、貴重品として将来は故人の姫君に与えようと考えていた高級な斑犀（はんさい）の石帯（せきたい）とすぐれた太刀（たち）などを袋に入れ、車へ使いが乗る時いっしょに積ませた。

「これは故人の志でございます」

と言わせて贈ったのであった。

帰った使いは贈られた品を大将に見せると、

「よけいなことをするものだね」

と薫は言った。使いの伝えた言葉は、

「奥さんが自身でお逢いになりまして、非常に悲しい御様子で、泣く泣くいろいろの話をなさいました。若い息子たちのことまでも御親切におっしゃっていただきましたことはもったいないことで、うれしく存じますが、しかしながらまたあまりに恐縮な当方の身分でございますから、人には何のためにとは絶対に知らせぬようにいたしまして、できのよろしい子供たちだけを皆お邸（やしき）へ差し上げることにしましょうということでした」

その言葉どおりに奇妙な親戚（しんせき）関係と人には見られることであろうが、宮中へそうした地方官が娘を差し上げないこともないのであるし、また素質がよくて帝王がそれをお愛しになることになってもお譏（そし）りする者はないはずである、人臣である人たちはまして世間から無視されている階級の家の娘を妻にしている類も多いのである、常陸守（ひたちのかみ）の娘であったと人が言っても自分の恋愛の径路が悪いものであれば指弾もされようが、そんなことではないのであるからはばかる必要もない、一人の大事な娘を不幸に死なせた母親を、その子ののこした縁故から一家に名誉の及ぶことで慰めるほどの

好意はぜひとも自分の見せてやらねばならないのが道であると薫は思った。

母の隠れ家へは常陸守が来て立ちながら話すのであったが、娘に出産のあったおりもおりにだれかの触穢（しょくえ）を言い立てて引きこもっていることなどで腹だたしいふうに言っていた。去年の夏以来姫君がどこにいるかをありのままには夫人の言ってなかった常陸守であったから、寂しい生活をしていることであろうと思いもし、言いもしていたのを大将に京へ迎え入れられたあとで、名誉な結婚をしたと知らせようとも夫人が思っていたうちに浮舟は死んでしまったのであったか

ら、隠しておくのもむだなことであると夫人は思い、薫と結婚をして宇治に住まわせられていたこと、そして病んで死んだ話を泣く泣く語るのであった。薫からもらった手紙も出して見せると、貴人を崇拝する田舎(いなか)風な性質になっている守は驚きもし臆(おく)しもしながら繰り返し繰り返し薫の手紙を読んでいる。

「幸福で名誉な地位を得ていて死んだ方だ。自分も大将の家人(けにん)の数にはしていただいている者で、お邸へはまいることがあっても近くお使いになることもなかった。とても気高(けだか)い殿様なのだ。息子たちのことを言ってくださったのは非常にあれらのためには頼もしいこと

だ」

こう言って喜ぶのを見ても、まして姫君が大将夫人として生きていたならばと思わないではいられない夫人は、臥しまろんで泣いていた。守もこの時になってはじめて泣いた。しかしながら浮舟が生きているとすれば、かえって異父弟の世話を引き受けようなどと薫はしなかったことであろうと思われる。自身の過失から常陸夫人の愛女を死なせたのがかわいそうで、せめて慰めを与えることだけはしたいと思う心から、他の譏りがあろうとも深く気にとめまいという気になっているのである。

薫は四十九日の法事の用意をさせながらも実際はどうあの人はなったのであろう、まだ一点の疑いは残されていると思うのであるが、仏への供養をすることは人の生死にかかわらず罪になることではないからと思い、ひそかに宇治の律師の寺で行なわせることにしているのであった。六十人の僧に出す布施の用意もいかめしく薫はさせた。母夫人も法会には来ていて、式をはなやかにする寄進などをした。兵部卿の宮からは右近の手もとへ銀の壺へ黄金の貨幣を詰めたのをお送りになった。人目に立つほどの派手なことはあそばせなかったのである。ただ右近が志として供物にしたのを、

事情を知らぬ人たちはどうしてそんなことをしたかと不思議がった。薫のほうからは家司（けいし）の中でも親しく思われる人たちを幾人もよこしてあった。在世中はだれもその存在を知らなんだ夫人の法事を、薫がこんなにまで丁寧に営むことによって、どんな婦人であったのかと驚いて思ってみる人たちも多かったが、常陸守が来ていて、はばかりもなく法会（ほうえ）の主人顔に事を扱っているのをいぶかしくだれも見た。少将の子の生まれたあとの祝いを、どんなに派手に行なおうかと腐心して、家の中にない物は少なく、［＃「、」は底本では「。」］支那（しな）、朝鮮の珍奇な織り物などをどうしてどう使おう

と驕（おご）った考えを持っていた守ではあったが、それは趣味の洗練されない人のことであるから、美しい結果は上がらなかった。それに比べてこの法会の場内の荘厳をきわめたものになっているのを見て、生きていたならば、自分らと同等の階級に置かれる運命の人でなかったのであったと守は悟った。兵部卿の宮の夫人も誦経（ずきょう）の寄付をし、七僧への供膳（きょうぜん）の物を贈った。

今になって隠れた妻のあったことを帝（みかど）もお聞きになり、そうした人を深く愛していたのであろうが、女二（にょに）の宮（みや）への遠慮から宇治などへ隠しておいたのであろう、そして死なせたのは気の毒であると思召した。

浮舟の死のために若い二人の貴人の心の中はいつまでも悲しくて、正しくない情炎の盛んに立ちのぼっていたころにそのことがあったため、ことに宮のお歎きは非常なものであったが、元来が多情な御性質であったから、慰めになるかと恋の遊戯もお試みになるようなこともようやくあるようになった。薫は故人ののこした身内の者の世話などを熱心にしてやりながらも、恋しさを忘られなく思っていた。

　中宮（ちゅうぐう）もまだそのまま叔父（おじ）の宮の喪のために六条院においでになるのであったが、二の宮はそのあいた式部卿にお移りになった。お身柄が一段重々しくおなり

になったために、始終母宮の所へおいでになることもできぬことになったが、兵部卿(ひょうぶきょう)の宮は寂しく悲しいままによくおいでになっては姉君の一品(いっぽん)の宮の御殿を慰め所にあそばした。すぐれた美貌(びぼう)であらせられる姫宮をよく御覧になれぬことを物足らぬことにしておいでになるのであった。右大将が多数の女房の中で深い交際をしている小宰相(こさいしょう)という人は容貌(ようぼう)などもきれいであった。価値の高い女として中宮も愛しておいでになった。琴の爪音(つまおと)も琵琶(びわ)の撥音(ばちおと)も人よりはすぐれていて、手紙を書いてもまた人と話しをしても洗練されたところの見える人であった。兵部卿の宮も長くこの人

に恋を持っておいでになるのであって、例の上手（じょうず）に説き伏せようとお試みになるのであるが、誘惑をされてだれも陥るような御関係を作りたくないと強い態度を変えないのを、薫（かおる）はおもしろい人であると思って好意が持たれるのである。このごろの薫が物思いにとらわれているのも知っていて、黙っていることができぬ気もして手紙を書いて送った。

哀れ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつ
つぞ経（ふ）る

私が代わって死んでおあげすればよかったように思われます。

と感じのよい色の紙に書かれてあった。身にしむような夕方時のしめっぽい気持ちをよく察して訪ねの文を送った心持ちを薫は感謝せずにはおられなかった。

つれなしとここら世を見るうき身だに人の知るまで歎きやはする

これを返歌にした。

答礼のつもりで、

「寂しい時の御慰問のお手紙はことにありがたく思われました」

と言いに小宰相の家を薫は訪(たず)ねて行った。貴人らしい重々しさが十分に備わり、こんなふうに中宮の女房の自宅へなど、今までは一度も行ったことのない薫が訪ねて来た所としては貧弱な邸(やしき)であった。局(つぼね)などと言われる狭い短い板の間の戸口に寄って薫の坐(ざ)しているのを片腹痛いことに思う小宰相であったが、さすがにあまりに卑下もせず感じのよいほどに話し相手をした。失った人よりもこの人のほうに才識のひらめきがあるではないか、なぜ女房などに出たのであろう、自

分の妻の一人として持っていてもよかった人であったのにと薫は思っていた。しかしながら友情以上に進んでいこうとするふうを少しも薫は見せていなかった。

蓮（はす）の花の盛りのころに中宮は法華（ほけ）経の八講を行なわせられた。六条院のため、紫夫人のため、などと、故人になられた尊親のために経巻や仏像の供養をあそばされ、いかめしく尊い法会（ほうえ）であった。第五巻の講ぜられる日などは御陪観する価値の十分にあるものであったから、あちらこちらの女の手蔓（てづる）を頼んで参入して拝見する人も多かった。五日めの朝の講座が終わって仏前の飾りが取り払われ、室内の装飾を改めるために、

北側の座敷などへも皆人がはいって、旧態にかえそうとする騒ぎのために、西の廊の座敷のほうへ一品の姫宮は行っておいでになった。日々の多くの講義に聞き疲れて女房たちも皆部屋（へや）へ上がっていて、お居間に侍している者の少ない夕方に、薫の大将は衣服を改めて、今日退出する僧の一人に必ず言っておく用で釣殿（つりどの）のほうへ行ってみたが、もう僧たちは退散したあとで、だれもいなかったから、池の見えるほうへ行ってしばらく休息したあとで、人影も少なくなっているのを見て、この人の女の友人である小宰相などのために、隔てを仮に几帳（きちょう）などでして休息所のできているのはここらで

あろうか、人の衣擦(きぬず)れの音がすると思い、内廊下の
襖子(からかみ)の細くあいた所から、静かに中をのぞいて見ると、
平生女房級の人の部屋(へや)になっているなどとは違い、
晴れ晴れしく室内の装飾ができていて、幾つも立ち違
いに置かれた几帳はかえって、その間から向こうが見
通されてあらわなのであった。氷を何かの蓋(ふた)の上に置
いて、それを割ろうとする人が大騒ぎしている。大人(おとな)
の女房が三人ほど、それと童女がいた。大人は唐衣(からぎぬ)、
童女は衫(かざみ)も上に着ずくつろいだ姿になっていたから、
宮などの御座所になっているものとも見えないのに、
白い羅(うすもの)を着て、手の上に氷の小さい一切れを置き、

騒いでいる人たちを少し微笑をしながらながめておいでになる方のお顔が、言葉では言い現わせぬほどにお美しかった。非常に暑い日であったから、多いお髪(ぐし)を苦しく思召すのか肩からこちら側へ少し寄せて斜めになびかせておいでになる美しさはたとえるものもないお姿であった。多くの美人を今まで見てきたが、それらに比べられようとは思われない高貴な美であった。御前にいる人は皆土のような顔をしたものばかりであるとも思われるのであったが、気を静めて見ると、黄の涼絹(すずし)の単衣(ひとえ)に淡紫(うすむらさき)の裳(も)をつけて扇を使っている人などは少し気品があり、女らしく思われたが、そうし

た人にとって氷は取り扱いにくそうに見えた。

「そのままにして、御覧だけなさいましよ」

と朋輩（ほうばい）に言って笑った声に愛嬌（あいきょう）があった。声を聞いた時に薫は、はじめてその人が友人の小宰相であることを知った。とどめた人のあったにもかかわらず氷を割ってしまった人々は、手ごとに一つずつの塊（かたまり）を持ち、頭の髪の上に載せたり、胸に当てたり見苦しいことをする人もあるらしかった。小宰相は自身の分を紙に包み、宮へもそのようにして差し上げると、美しいお手をお出しになって、その紙で掌（て）をおぬぐいになった。

「もう私は持たない、雫（しずく）がめんどうだから」
と、お言いになる声をほのかに聞くことのできたのが薫のかぎりもない喜びになった。まだごくお小さい時に、自分も無心にお見上げして、美しい幼女でおありになると思った。それ以後は絶対にこの宮を拝見する機会を持たなかったのであるが、なんという神か仏かがこんなところを自分の目に見せてくれたのであろうと思い、また過去の経験にあるように、こうした隙見（すきみ）がもとで長い物思いを作らせられたと同じく、自分を苦しくさせるための神仏の計らいであろうかとも思われて、落ち着かぬ心で見つめていた。ここの対の

北側の座敷に涼んでいた下級の女房の一人が、この襖子（からかみ）は急な用を思いついてあけたままで出て来たのを、この時分に思い出して、人に気づかれては叱（しか）られることであろうとあわてて帰って来た。襖子に寄り添った直衣（のうし）姿の男を見て、だれであろうと胸を騒がせながら、自分の姿のあらわに見られることなどは忘れて、廊下をまっすぐに急いで来るのであった。自分はすぐにここから離れて行ってだれであるとも知られまい、好色男らしく思われることであるからと思い、すばやく薫は隠れてしまった。その女房はたいへんなことになった、自分はお几帳（きちょう）なども外から見えるほどの隙（すき）をあけ

て来たではないか、左大臣家の公達(きんだち)なのであろう、他家の人がこんな所へまで来るはずはないのである、これが問題になればだれが襖子をあけたかと必ず言われるであろう、あの人の着ていたのは単衣(ひとえ)も袴(はかま)も涼絹(すずし)であったから、音がたたないで内側の人は早く気づかなかったのであろうと苦しんでいた。

薫は漸く僧に近い心になりかかった時に、宇治の宮の姫君たちによって煩悩(ぼんのう)を作り始め、またこれからは一品(いっぽん)の宮(みや)のために物思いを作る人になる自分なのであろう、その二十(はたち)のころに出家をしていたなら、今ごろは深い山の生活にも馴(な)れてしまい、こうした乱れ心を

いだくことはなかったであろうと思い続けられるのも苦しかった。なぜあの方を長い間見たいと願った自分なのであろう、何のかいがあろう、苦しいもだえを得るだけであったのにと思った。

　翌朝起きた薫は夫人の女二の宮の美しいお姿をながめて、必ずしもこれ以上の御美貌（びぼう）であったのではあるまいと心を満ち足りたようにしいてしながら、また、少しも似ておいでにならない、超人間的にまであの方は気品よくはなやかで、言いようもない美しさであった。あるいは思いなしかもしれぬ、その場合がことさらに人の美を輝かせるものだったかもしれぬと薫は思

い、

「非常に暑い。もっと薄いお召し物を宮様にお着せ申せ。女は平生と違った服装をしていることなどのあるのが美しい感じを与えるものだからね。あちらへ行って大弐（だいに）に、薄物の単衣（ひとえ）を縫って来るように命じるがいい」

と言いだした。侍している女房たちは宮のお美しさにより多く異彩の添うのを楽しんでの言葉ととって喜んでいた。いつものように一人で念誦（ねんず）をする室（へや）のほうへ薫は行っていて、昼ごろに来てみると、命じておいた夫人の宮のお服が縫い上がって几帳（きちょう）にかけられて

あった。
「どうしてこれをお着にならぬのですか、人がたくさん見ている時に肌(はだ)の透く物を着るのは他をないがしろにすることにもあたりますが、今ならいいでしょう」
と薫は言って、手ずからお着せしていた。宮のお袴(はかま)も昨日の方と同じ紅であった。お髪(ぐし)の多さ、その裾(すそ)のすばらしさなどは劣ってもお見えにならぬのであるが、美にも幾つの級があるものか女二の宮が昨日の方に似ておいでになったとは思われなかった。氷を取り寄せて女房たちに薫は割らせ、その一塊(ひとかたまり)を取って宮にお持たせしたりしながら心では自身の稚態がおか

しかった。絵に描いて恋人の代わりにながめる人もないのではない、ましてこれは代わりとして見るのにかけ離れた人ではないはずであると思うのであるが、昨日こんなにしてあの中に自分もいっしょに混じっていて、満足のできるほどあの方をながめることができたのであったならと思うと、心ともなく歎息の声が発せられた。

「一品の宮さんへお手紙をおあげになることがありますか」

「御所にいましたころ、お上がそうおっしゃったものですから、差し上げたこともありましたけれど、ずい

ぶん長く御交渉はなくなっています」
「人臣の妻におなりになったからといって、あちらからお手紙をくださらなくなったのでしょうが、悲観せられますね。そのうち私から中宮へあなたが恨んでおいでになると申し上げよう」
と薫は言う。
「そんなこと、お恨みなど私はしているものでございますか。いやでございます」
「身分が悪くなったからといって軽蔑をなさるらしいから、こちらからは御遠慮して消息を差し上げないとそんなふうに言いましょう」

こんなことを言ってその日は暮らし、翌日になって大将は中宮の御殿へまいった。例の兵部卿（ひょうぶきょう）の宮も来ておいでになった。丁子（ちょうじ）の香と色の染（し）んだ羅（うすもの）の上に、濃い直衣（のうし）を着ておいでになる感じは美しかった。一品（いっぽん）の宮（みや）のお姿にも劣らず、白く清らかな皮膚の色で、以前より少しお痩（や）せになったのがなおさらお美しく見せた。女宮によく似ておいでになるということから、またおさえている恋しさがわき上がるのを、あるまじいことであると思い、静めようとするのもあの日の前には知らぬ苦しみであった。兵部卿の宮は絵をたくさんに持って来ておいでになったが、そのうちの幾つかを

女房に姫宮のほうへ持たせておあげになり、御自身もあちらへおいでになった。
薫は后の宮のお近くへ寄って行き、御八講の尊かったことを言い、六条院のことも少しお話し申し上げながら、残った絵を拝見している時に、
「私の所に来ておいでになります宮さんが、宮廷から離れて屈託した気持ちになっておられますのをお気の毒だと見ております。一品の宮様のお消息などをいただけませんことを人妻に降ったことで愛をお捨てになったように思って楽しまないふうなのでございますが、こういたしたものなどをときどき見せてあげてく

だすってはいかがでしょう。私がその使いはいたしま
す。私どものほうのも持ってまいります」
と中宮へ申し上げると、
「まあそんなことで御交際をおやめになるものですか。
同じ御所の中におられたころは、近いものですからと
きどき手紙が通ったのでしょうが、遠く離れ離れにお
なりになった時からお手紙が途絶え始めて、そのまま
になったことなのでしょう。そのうち私からお勧めし
てお書きになるようにしますよ。そちらからだってお
手紙をお送りになればいいのにね」
と、宮は仰せられた。

「そちらからは出過ぎたように思われておできにならないのでしょう。初めから御交渉のなかった方にいたしましても、私と宮様がたとの縁の続きに愛しておあげくださることになるのがうれしい成り行きなのですが、まして以前から御交際のあった間柄でおありになるのですから、私の所へ来られましたあとでお捨てになるのは、あの宮さんにとっておかわいそうなことです」

などと申しているのを、恋が言わせることと中宮はお悟りにならなかった。

薫は中宮のお居間を辞して、先夜の好意のある女友

人にも逢おう、あの思い出の廊の座敷を心の慰めに見て行こうと思い、縁側伝いに西に向いて歩いて行った。御簾(みす)の中にいる女房たちはそれだけのことにすら心づかいのされる薫の大将であった。渡殿(わたどの)のほうには左大臣の息子らがいて、女房たちと話し合っている様子であったから、この人は妻戸のところにすわって、

「始終この院へはまいっている私ですが、こちらの宮様の御殿へ伺うことができないでいますと、自然老人めいた気持ちになるようになったのですが、これからはそうしていまいと決心してまいったのですよ。馴(な)れない人間の恰好(かっこう)は滑稽(こっけい)なものに若い人たちからは見ら

れることでしょう」

甥(おい)の公子たちのほうを見ながらこう言っていた。

「ただ今からお習いになりましたなら新鮮なお若さが拝見されることでしょう」

などと戯れて言う女房らからも怪しいまでの高雅な感じの受け取られるのであった。何をおもな話題にするというのでもなく、世間話を平生よりもしんみりと話し込んで薫(かおる)はいた。

姫宮は中宮(ちゅうぐう)の御殿のほうへおいでになった。后の宮が、

「大将があちらへ行きましたか」

とお尋ねになると、一品の宮のお供をしてこちらへ来た大納言の君が、
「小宰相に話があると言っていらっしゃいました」
と申した。
「まじめな人であって、さすがに女の友だちにも心の惹かれるところがあってむだ話もして行きたいのだろうがね。才能のない人が相手をしては恥ずかしい。女の価値がすぐ見破られるからね。小宰相ならまず安心だけれど」
こんなことをお言いになる宮は、御弟なのであるが、薫に周囲を観察されることを恥ずかしく思召し、女房

らも飽き足らず思われるところを見せぬようにしてほしいと思召すのである。

「あの人をだれよりも御ひいきになさいまして、部屋のほうへも寄ってお行きになることがよくあるようでございます。しんみりとお話をしておいでになることもございまして夜がふけてお帰りになることはありましても恋愛関係と申すようなことはなさそうに思われます。あの人兵部卿の宮様の御性情には反感を持っておりまして、お返辞すらよくいたさないようでございますのはもったいないことでございます」

と言い、大納言の君が笑うと、中宮もお笑いになっ

て、
「あの宮の多情な本質が直感できるのだからいいね。どうしてあの方の悪癖を直させたらいいだろう、恥ずかしいと私は思う。だれも皆そう思っているだろうね」

こうお語りになった。

「妙な話を私は聞いたのでございます。あの大将さんのお亡(なく)しになりました人は兵部卿の宮様の二条の院の奥様のお妹さんだったそうでございます。前常陸守の妻はその方の叔母(おば)であるとも、母であるとも申しますのはどういう理由(わけ)であるのかよく存じません。その大

将の愛人の所へそっと兵部卿の宮様も通ってお行きになったということでございまして、大将さんがそれをお聞きになりましたのか、にわかに宇治から京へ迎えようとなすって、監視の人などをきびしくお付けになりましたところに、宮様はまたおいでになったのでございますが、家の中へおはいりになることができませんで、危険なことでございますが、お馬のままで外に立っておいでになり、それなり帰っておしまいになったということでございまして、女も宮様をお慕いしていたのでしょうか、にわかに行くえがわからなくなりましたのを、川へ身を投げたのであろうと、乳母（うば）というよ

うな者が泣き騒いで言っていたそうでございます」
大納言の君はこんな話を申し上げた。中宮がお驚きになったことは言うまでもない。
「だれがまあそんな噂話をしていたの、ほんとうにかわいそうな話ではないか。そんな出来事はすぐ噂になるものだのに、そうでもなし、また大将もそんなふうには話さずに、人生の悲哀を強調して話すだけで、また宇治の宮さんの一族が皆短命で死ぬのは悲しいことだとは言っていたけれども」
「ほんとうでございますか、どうでございますか、しもざまの者は確かでないこともほんとうらしく話にい

たすものですが、その宇治の山荘におりました下童(しもわらわ)がついこのごろ宰相の実家のほうへ来まして、確かなことのように申していたそうでございます。そうした死に方をなさいましたことを世間へ知らすまい、自殺などという思いきったことをした人だと言わすまいと皆が隠すことに骨を折ったそうでございます。それで大将さんもくわしいお話をあそばさなかったのではないでしょうか」

「その話をまたほかへ行ってするなと宰相からお言わせよ。そうした問題で宮は自身をだいなしにしておしまいになることにもなり、世間からも軽蔑(けいべつ)されること

におなりになるだろう」

こうお言いになって、中宮は非常に御心配をあそばす御様子であった。

それからまもなく一品の宮から女二の宮へお手紙が来た。御手跡のおみごとであるのを見ることのできたことが薫にはうれしくて、期待にはずれないごりっぱさである、もっと早くこれが拝見できる方法を講ずべきであったなどと思った。多くの美しい絵などを中宮からもお送りになった。お礼として薫からもそれにまさった絵を集めて差し上げることにした。小説の芹川(せりかわ)の大将が女一の宮を恋して秋の日の夕方に思い侘(わ)びて

家から出て行くところを描いた絵はよく自身の心持ちが写されているように思われる薫であった。その人のように成功すべき恋でないのが残念であった。

荻の葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみにける

と書き添えたい気がするのであるが、そうしたことは気ぶりにも知れたならばどんなことの言われるかしれぬ世の中であるからと、思うことすらも洩らしがたい恋に心を悩ませ、はては宇治の大姫君さえ生きてい

てくれたならば、その人を妻とすることができていたのであれば、どんな人を見ても心の動揺することなどはなかったはずである。現代の帝王の御女（おんむすめ）を賜わるといっても、自分はお受けをしなかったはずである、また自分がそれほど愛している妻があるとわかっておいでになって姫宮をお嫁（とつ）がせになることもなかろう、何といっても自分の心の混乱し始めたのは宇治の橋姫のせいであると、こんなことを思ってゆくうちに薫の心はまた二条の院の女王の上に走って、恋しくも恨めしくもなり、取り返されぬ昔を愚かしいまでに残念に思った。もうどうすることもできないことなのである

と、それを心に片づけたあとでは、また自殺をしてしまった浮舟（うきふね）が、思想的に幼稚でよこしまな情熱に逢（あ）ってたちまち動かされていった軽率さを認めながらも、さすがに煩悶を多くしていたこと、そのころに自分の気持ちの変わったことで、自責の念から歎きに沈んでいた様子を宇治で聞いて知ったことも思い出され、妻というような厳粛な意味の相手ではなく、心安く可憐（かれん）な愛人としておきたいと思うのにはふさわしくかわいい女性であったと考えられ、もう宮に不快の念を持つまい、女をも恨むまい、ただ自分の非常識から若い愛人をああした場所へ置き放しにしていたのがあやまち

の原因だったのであると、こんなふうに物思いの末にはあきらめをつけることにもなった。

静かな落ち着いた薫さえこんなふうに恋愛については身体（からだ）にもさわるほどな苦しみも時には味わうのであるから、まして浮舟をお失いになった兵部卿の宮は心を慰めかねておいでになって、その人の形見の人として悲しみを語り合う人さえもおありでなく、対の夫人だけは哀れな人であったと言ってくれはするものの、姉妹（きょうだい）として交わっていた期間はわずかなことであったから、深い悲しみは覚えているはずもない、また宮としては思召すままに恋しい悲しいとお言いになるこ

とも、夫人に向かってのことであるからお心のとがめられることであるために、あの山荘の侍従をお呼び寄せになった。女房たちは皆ちりぢりに去ってしまったあとに、乳母（めのと）と右近、侍従だけは故人が最も親しんだ人たちであったから、喪の家から離れず、一方は親子であって、侍従は関係のない間柄ではあるが、いっしょに山荘へ残って暮らしていたのであったが、荒々しい川音を聞くのも、そのうち京の邸（やしき）へ姫君の迎えられて行く日を楽しみにして辛抱（しんぼう）されたものの、情けなく、気味悪くばかり思われて、京のちょっとした知り合いの家へこのごろは侍従だけが移って来ていた。宮がお

捜させになってこのまま二条の院の女房になるようにと仰せになるのであったが、夫人はともかくも、他の女房たちから浮舟の姫君と宮とのあるまじい情交の起こっていたことで何かと非難がましいことを言われるであろうことが思われお受けをしなかった。中宮の女房になってお仕えしたいとそれとなく内記に言ってもらうと、

「それはよい。そして自分が陰で勤めよくなるようにしてやろう」

と言う宮のお返辞であった。侍従は姫君を失った心細さも慰むかと思い、手蔓（てづる）を求めて目的の宮仕えをす

る身になった。見た目のきれいな下級女房であると人も認めて、侍従は悪くも言われていなかった。大将もよくまいるのを蔭(かげ)で見るたびに昔が思われる物哀れな心になった。貴族の姫君たちだけのお仕えしている場所だと聞いていて、そうした上の女房たちの顔をこのごろ皆見知るようになってから考えても、浮舟の姫君ほどの美貌の人はないようであった。

今年の春お薨(かく)れになった式部卿(しきぶきょう)の宮の姫君を、継母(ままはは)の夫人が愛しないで、自身の兄の右馬頭(うまのかみ)で平凡な男が恋をしているのに、姫君をかわいそうとも思わずに与えようとしていることを中宮へある人から申し上げる

と、

「気の毒な、宮様がたいへん大事になすった女王(にょおう)さんを、そんな廃(すた)り者にしてしまおうとするなどとは」

と憐(あわれ)んで仰せられた。

「たよりない心細い思いをしているあなたにそうしたあたたかい同情を寄せてくださるのだから、中宮へお仕えしたら」

と、兄の侍従も宮仕えを勧めた女王を、このごろ中宮は手もとへ侍女にお迎えになった。女一(にょいち)の宮(みや)のお相手として置くのによい貴女(きじょ)と思召して、特別な御待遇を賜わって侍していたのであったが、お仕えする身で

あるかぎり、やはり宮の君などと言われ、唐衣（からぎぬ）までは着ぬが裳（も）だけはつけて勤めているのは哀れなことであった。兵部卿（ひょうぶきょう）の宮は、この人だけは恋しい故人に似た顔をしているであろう。式部卿の宮と八の宮は御兄弟なのであるからなどと、例の多情なお心は、昔の人の恋しいために、新たな好奇心もお起こしになることがやまず、いつとなく宮の君を恋の対象としてお考えになるようになった。

人生は味気ないとこの女王についても薫は思うのであった。まだ昨今というほどのことではないか、東宮の後宮へお入れになろうと父宮がお思いになり、自分

へも娶(めと)らせようとされた姫君である、栄えた人のたちまち衰えてゆくのを見ては、水へはいってしまった人はそれを見ぬだけ賢明であったかもしれぬなどと薫は思い、他の女房に対するよりもこの女王に好意を寄せていた。

六条院に中宮(ちゅうぐう)のおいでになることは、宮中のお住居(すまい)よりも広く住みよくだれも思い、時々まいるだけで始終は侍していぬ人までも皆上がって来ていて、はるばると多く続いた対、廊、渡殿の座敷は女房で満ちていた。左大臣は父君の院の御在世当時にも劣らず中宮のためにあらゆる物をととのえて奉仕していた。末

広がりになった一族であったから、かえって昔よりも六条院のはなやかさはまさってさえ見えた。兵部卿の宮が今までのようなふうでおありになれば、この集まった女性の中のある人々とこの幾月かのうちにはどんな問題を起こしておいでになるかもしれないのであるが、すっかりと冷静におなりになり、人から見れば少し性質がお変わりになったかと思われたのであるが、近ごろになってまた宮の君にお心を惹(ひ)かれ、御本性どおりにつきまとっておいでになった。

　秋冷の日になって中宮は宮中へ帰ろうとあそばされるのであったが、秋の盛りの紅葉(もみじ)の季にここで逢えな

いのは残り惜しいことであると若い女房たちは言い、だれも皆実家にいず、このごろは六条院にまいっていた。水を愛し、月の景色（けしき）を喜んで音楽の催しなども常にあった。兵部卿の宮は常よりもはなやかな六条院を愛して、この空気の中心のようになっておいでになるのである。朝夕にお顔を見ていながらも、いつも今咲きそめた花に逢（あ）う気のされる兵部卿の宮であった。薫はそれほど入り立っていないのであるために、若い中宮の女房たちは、この人が来れば緊張してしまうのであった。ちょうどこの二人の若い貴人の同時に中宮のお居間に来合わせている時であったが、宇治にいた侍

従は物蔭からのぞいて、どちらにもせよこのりっぱな方々の一人に愛されて生きておいでになればよかった。恵まれておいでになった幸運をわれから捨てておしまいになった姫君であると思い、他の人には宇治の山荘のこと、薫の愛人であった姫君のことなどは知ったふうには言ってないことであったから心一つに残念がっていた。兵部卿の宮が御所のお話などを細かく母宮へしかかっておいでにもなったため、薫がお居間を出て行こうとするのを見、自分を見つけさすまい、一年の忌の来るのも済まさずに宇治を去ったのは故人へ情のないことであるとは思われたくないと思い、侍従はす

ぐに隠れてしまった。
東の廊の座敷のあいた戸口に女房たちがおおぜいいてひそひそと話などをしている所へ薫は行き、
「私をあなたがたは親しい者として見てくださるでしょうか、女にだって私ほど安心してつきあえるものではありませんよ。それでも男ですから、あなたがたのまだ聞いていない新しい話も時にはお聞かせすることができるのですよ。おいおい私の存在価値がわかっていただけるだろうという自信がそれでもできましたからうれしく思っています」
こんな戯れを言いかけた。だれも晴れがましく思い、

返辞をしにくく思っている中に、弁の君という少し年輩の女が、
「お親しみくださる縁故のない者がかえって私のように恥じて引っ込んでいないことになります。ものは皆合理的にばかりなってゆくものではございませんですね。だれの家のだれの子でございますからと申してお つきあいを願うわけのものでもありませんけれど、羞恥(しゅうち)心を取り忘れたようにお相手に出ました者はそれだけの御挨拶(あいさつ)をいたしておきませんではと存じますから」
と言った。

「羞恥心も何も用のない相手だと私の見られましたのは残念ですね」

こんなことを薫(かおる)は言いながら室(へや)の中を見ると、唐衣(からぎぬ)は肩からはずして横へ押しやり、くつろいだふうになって手習いなどを今までしていた人たちらしい。硯(すずり)の蓋(ふた)に短く摘んだ草花などが置かれてあるのはこの人らがもてあそんだものらしい。ある人は几帳の立ててある後ろへ隠れ、ある人は向こうを向き、ある者は押しあけられてある戸に姿の隠れるようにしてすわっているので、頭の形だけが美しく見えた。すべて感じよく思って薫は硯を引き寄せ、

女郎花(をみなへし)乱るる野べにまじるとも露のあだ名をわれにかけめや

こう書いて、

「安心していらっしゃればいいのに」

と言い、すぐ近くの襖子(からかみ)のほうを向いている人に見せると、相手は身動きもせず、しかもおおように早く、

花といへば名こそあだなれをみなへしなべての露に乱れやはする

と書いた。手跡は、少ない文字であるが気品の見える感じよいものであるのを、薫は何という女房であろうと思って見ていた。今から中宮のお居間へこの戸口を通って行こうとして、薫の来たために出るにも出られずなった人らしく思われた。弁の君は、

「わざと老人じみたことをお言いになっては反感が起こるものですよ」

と言い、

「旅寝してなほ試みよをみなへし盛りの色に移り移

らず

そのあとであなたをどんな性質で、お堅いともそうでないとも、きめましょう」

とも言う。

宿貸さば一夜は寝なんおほかたの花に移らぬ心なりとも

薫が言ったのである。

「私を侮辱あそばすのでございますね。自分のことで

はございませんよ。一般的に抗議を申し上げただけでございます」

と弁は言う。こんなふうに戯れ言も薫は長くは言っていないらしく見えるのを若い女房たちは飽き足らず思っていた。

「思いやりのないことをしましたね。あなたの道をあけましょう。とりわけて私に顔をお見せにならない態度には理由のあることでしょう」

と言い、薫の立って行くのを見て、だれもが弁のようにはしゃぐ者のように思われぬかと気にする人もあった。東の高欄によりかかって、叢（くさむら）の中に夕明り

を待って咲きそめる花のある植え込みを薫はながめていた。何も皆身にしむように思われる薫は、

「就中断腸是秋天(なかんづくはらわたをたつはこれあきのてん)」と低い声で口ずさんでいた。先刻の人らしい衣擦(きぬず)れの音がして、中央の室(へや)から抜けてあちらへ行った。兵部卿の宮がそこへ歩いておいでになって、

「ここから今あちらへ行ったのはだれか」

と他の者に尋ねておいでになった。

「一品(いっぽん)の宮(みや)様のほうの中将さんでございます」

と答える声も御簾(みす)の中でした。おもしろくないことである、だれであろうとかりそめにもせよ好奇心の起

こった人が、すぐにだれそれであると名ざしをして聞かれるではないか、とその女がかわいそうに思われ、また兵部卿の宮には皆よくお馴(な)れしていて、隠すところもなくなっているのがなんとなくうらやましい気もする薫であった。自由に接近してお行きになることができ、上手(じょうず)な技巧で誘惑をあそばされては女も負けることになるのであろう、自分にはそんなことができず、こちらの人たちとは、縁の遠いうとうとしいものになっているのが残念である。侍している人の中で、どうかして近ごろ兵部卿の宮がはげしく恋をしておいでになる人を自分のものにして、あの時に自分が苦しん

だような思いを宮にもお味わわせしたい。聡明な女であれば自分のほうを愛するはずであるとは思われるが、こちらの考えどおりな心を持っているかどうかは頼みになるものでないと思われるにつけても、二条の院の女王が、宮のああした御放縦な恋愛生活を飽き足らず見て、自分の愛を頼むようになり、それを恋にまでなってはならぬ、世間の批評がうるさいと思いながら友情だけはいつも捨てぬのは珍しく聡明な態度で、自分としてはうれしいかぎりである、そんなすぐれた女性はこのおおぜいの若い女房たちの中に一人でもあるであろうか、深く接近して見ぬせいかないように思われる、

物思いに寝ざめがちな慰めに恋愛の遊戯も少し習いたいと思うが、もう今は似合わしくないと薫は思った。例の氷を割られた日の西の渡殿へ、その日のようにふらふらと薫が来てしまったのも不思議であった。姫宮は夜だけ母宮の御殿のほうへおいでになるため、もうお留守になっていて、女房たちだけで月を見ると言い、渡殿に打ち解けて集まっていた。十三絃（げん）の琴を懐しい音（ね）で弾（ひ）くのが聞こえた。人々の思いもよらぬこんな時に薫が出て来て、

「なぜ人を懊悩（おうのう）させるように琴など鳴らしていらっしゃるのですか。（遊仙窟（いうせんくつ）。耳聞猶気絶（みみにきくもなほきたえんとす）、

眼見若為憐（めにみていかばかりおもしろからん））」

こう言うのに驚いたはずであるが、少し上げた御簾（みす）をおろしなどもせず、一人は身を起こして、

「崔季珪（さいきけい）のようなお兄様がいらっしゃるかしら」

と言う。その声は中将の君といわれていた女であった。

「私は宮様の母方の叔父（おじ）なのですよ。（遊仙窟。

容貌似舅潘安仁外甥、（かんばせはをぢはんあんじんににたりぐわいせいなればなり）

気調如兄崔季珪小妹（きざしはあにさいきけいのごとしいもうとなればなり））」

こんな冗談（じょうだん）を言ったあとで、

「いつものように中宮様のほうへ行っておしまいに

なったのでしょうね、宮様はお里住まいの間は何をしていらっしゃるのですか」

思わずこんな問いを薫は発することになった。

「どこにいらっしゃいましても、別にこれという変わったことはあそばしません。ただいつもこんなふうでお暮らしになっていらっしゃるばかり」

聞いていて美しいお身の上であると思うことで知らず知らず歎息の声の洩(も)れて出たのを、怪しむ人があるかもしれぬと思う紛らわしに、女房たちが前へ出した和琴(わごん)を、調子もそのままでかき鳴らす薫であった。律の調べは秋の季によく合うと言われるものであったか

ら、気も入れて弾かぬ琴の音であるが、みずから感じの悪いものとは思われぬものの、長くも弾いていなかったのを、熱心に聞きいっていた人たちはかえって残り多さも出て苦しんだ。自分の母宮もこの姫宮に劣る御身分ではない、ただ后腹というわずかな違いがあっただけで朱雀院（すざく）の帝（みかど）の御待遇も、当帝の一品（いっぽん）の宮を尊重あそばすのに変わりはなかったにもかかわらず、この宮をめぐる雰囲気（ふんいき）とそれとに違ったもののあるのは不思議である。明石（あかし）の女のもたらしたものはことごとく高華なものであったとこんなことを思う続きに薫は運命が自分を置いた所はすぐれた所であるに違

いない、まして女二の宮とともに一品の宮までも妻に得ていたならばどれほど輝かしい運命であったであろうと思ったのは無理なことと言わねばならない。
宮の君はここの西の対の一所を自室に賜わって住んでいた。若い女房たちが何人もいる気配（けはい）がそこにして皆月夜の庭の景色（けしき）を見ていた。そうであったあの人も浮舟らと同じ桐壺（きりつぼ）の帝（みかど）の御孫であったと薫は思い出して、
「式部卿の宮様に私を愛していただいたものなのだから」
と独言（ひとりごと）を言いその座敷の前へ行ってみた。美しい

姿の童女が略服になって、二、三人縁側へ出ていたが、薫を見て晴れがましいというように中へ隠れてしまった。これが普通の所の情景であると今見て来た廊の座敷と比べて薫は思った。南の隅(すみ)の間のそばで咳(せき)払いをすると、少し年のいったような女房が出て来た。

「人知れず好意を持っている者ですなどと申せば、それはだれも言うことだとお聞きになるでしょうし、またそうした若い人たちの口真似(まね)をすることも私にはできません。それよりも言葉でない実質的な御用に立つことはないかと捜しております」

と言うと、その女は女王にも取り次がず、賢がって、

「思いがけぬお身の上におなりあそばしましたことにつきましても、宮様がどんなにいろいろなお望みを姫君の将来にかけておいでになりましたかと思われまして、悲しゅうございます。いつも御親切に仰せくださいまして、お宮仕えにおいでになりました御非難のお言葉なども、ごもっともだと女王(にょおう)様は言っておいでになることでございますよ」

こんなことを言う。並み並みの家の娘などのように聞こえることもはばからず言う女であるといやな気のした薫は、

「もとから血族であるためというようなことでなしに、

好意を持つ男として、何かの御用をお命じくだすったらうれしいだろうと思います。うとうとしくお取り次ぎでお話などをしてくださるだけでは私も尽くしたいことがお尽くしできない」

と言った。そうであったというふうに女房たちは思い、姫君を引き動かすばかりにしたはずであったから、

「松も昔の（たれをかも知る人にせん高砂（たかさご）の）と申すような孤立のたよりなさの思われます私を、血族の者とお認めくださいましておっしゃってくださいますあなたは頼もしい方に思われます」

取り次ぎの者に言うというふうにでもなしに、こう

いう声は若々しく愛嬌（あいきょう）があって優しい味があった。ただの女房としてであればよい感じに受け取れたであろうが、今の身になっては、すぐに人に逢ってこれだけの言葉もみずから発しなければならぬものと思うようになったかと考えるとこの人を飽き足らぬものに薫は思われた。容貌（ようぼう）も必ず艶（えん）な人であろうと思い、見たい心も覚えたが、この人がまた宮のお心を乱す原因になることであろうと思われ、絶対の信用の持てない人は相手にしたくない気にもなった。この人こそは最上の家庭に生まれ、大事がられて育った、典型的な姫君というのに不足のない人で、他に幾人（いくたり）もない身の上

だったのであるが、自分として頼もしい女性と思われぬのはどうしたことであろう、僧のような父宮に育てられ、都を離れた山里で大人（おとな）になった人が姉女王にもせよ中の君にもせよ、皆完全な貴女（きじょ）になっていたではないか、このはかない性情の人、軽々しい人と今の心からは軽侮の念で見られる人も、こうしたわずかな接触で覚えさせた感じは悪いものでなかった、と薫は八の宮の姫君たちのことばかりがなつかしまれるのであった。

宇治の姫君たちとはどれもこれも恨めしい結果に終わったのであったとつくづくと思い続けていた夕方に、

はかない姿でかげろう蜻蛉（とんぼ）の飛びちがうのを見て、

ありと見て手にはとられず見ればまた行くへもし
らず消えしかげろふ

「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきか
に消ゆる世なれば」と例のように独言（ひとりごと）を言っていた。

底本：「全訳源氏物語　下巻」角川文庫、角川書店
　　１９７２（昭和47）年２月25日改版初版発行
　　１９９５（平成７）年５月30日40版発行
※このファイルは、古典総合研究所（http://www.genji.co.jp/）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。
※校正には、２００２（平成14）年４月10日44版を使用しました。
入力：上田英代
校正：鈴木厚司
２００４年８月20日作成